

---

# 影紡ぎ島の祟り神

狸貫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

影紡ぎ島の祟り神

### 【Nコード】

N4635H

### 【作者名】

狸貫

### 【あらすじ】

十二年前、影紡ぎ島で起きた惨劇を調べてほしいと毛利探偵事務所に依頼書と多額の依頼料が前払いされてた為仕方なく向かう事となったが、そこで事件が次々とコナン達に襲いかかってくる。初投稿なのでいたらない部分もありますがどうぞお付きあい下さい

## プロローグ

快晴の空の下

一隻の漁船がゆっくりと走っていた

「わあ〜！」

見て見てコナン君

お魚がいっぱいいるよ〜！」

蘭は船から海を覗き込むようにして眺めていた

「蘭ねえーちゃん

そんなに身を乗り出していると危ないよ？

ちよつと海が荒れているみたいだし」

コナンは心配そうに

蘭の隣にやってきた

「つたく、ガキじゃあるめえし…」

おい蘭、ボウズの言う通り海に落っこちっぞ？」

小五郎は不機嫌にそう言うと突然船べりに向かい

海に顔を突き出し  
気持ち悪そうに吐き出す

「……」

二人は呆れながら笑う

「ちょっと大丈夫？お父さん」

蘭は小五郎の背中をさすってやった

「ねえねえおじいさん」

コナンは船を操縦している漁師のおじいさんに話し掛けた

「ん？どうしたボウズ」

「ボク達が向ってる影紡ぎ島ってどういう所？  
なんか変わった名前の島なんだね」

漁師のおじいさんはしばらく口を重そうにしていたがやがて口を開いた

「あの島はな、十二年前  
殺人事件があつたんだよ  
あそこに住んどつた島の住民全員殺されちまつたんだ

それが不思議な話しでな  
あの島には祟り神があつて年に一度祟りを鎮めるための儀式がある  
んだが

その儀式の日に皆死んじまつたつて話だ

ワシら地元民は祟りで呪い殺されちまつたんだろつと噂してたが…  
真相は未だ分からずじまい

影紡ぎつてのはその祟り神の名前の由来らしいが  
ワシらもようわからんでな」

祟りと聞いて蘭はビクツと体を強張らせた

「ほら、見えてきたぞ  
あれが影紡ぎ島じゃ」

そう言われてコナンは外にでると前方に島が広がって見えた

あの島には何か影を纏っているような  
不吉な嫌な予感がした

## 東の探偵、西の探偵「前編」

船着き場に漁船を付け

コナン達は降りて

ここまで送ってくれた漁師のおじいさんにお礼を言って目的の場所へ歩き始めた

「もうお父さんすっかりしてよ！

だから昨夜あれ程お酒飲み過ぎないでねって言ったのに」

フラフラ歩く小五郎を支えながら歩く蘭達の後ろで

コナンは呆れた目で小五郎をみた

(はは…二日酔いに船酔いどうしようもねえな、このおっちゃん)

しばらく歩いてると

森の中に入った

この森からは目的地まで一本道なので迷う事はなかったが昼間でも薄暗さが残るここは不気味であった

「…さっきの漁師さんが言ってた事、本当かなあ？」

蘭が不安を口に出した  
オカルトや幽霊などが苦手な彼女にとって  
この状況は耐え難いものだった

「ああ…この島住人全員殺害されたって話し？  
それは祟りじゃなく殺人事件じゃないの？

おっちゃんがここに呼ばれたのもその事件の謎を解いてほしいから  
で…」

ふと疑問に思った

なぜ今更十二年経った昔の事件を調べて欲しいなんて依頼が来たのか

6

コナンは先程から  
渦巻く何かが頭から離れずにいた

何か起こりそうな嫌な予感…

「あつ見えたよ！  
広いお屋敷ねえ」

さっきまでの不安はどこへやら  
蘭は森を抜けた先に見えた館を見つけると嬉しそうに言った

「ほらお父さん！

しっかり歩いてっもうすぐ着くから！

そんなんで依頼の方大丈夫なの？」

蘭は小五郎から離れ

立派な門の前に向かって歩きチャイムを鳴らした

「お待ちしておりました

毛利様とお連れの方ですね？

遠い所からよくいらっしやいました

さあ中へどうぞ

お疲れでしょう？」

三十代半ばの女性が入り口にやってきて三人を出迎えてくれた  
その女性を見た瞬間

「いやいや、疲れなど…

あなたの美しい顔を見たらふっ飛んでしまいました  
どうですか？これから私と海にバカンスでも！」

「…すみません

私この館のメイドをつとめてる小林礼子と申します  
皆様をもてなさなくてはなりませんので…」

出迎えてくれたメイドの礼子は苦笑いで受け流した

「もつお父さん…」

(本当どうしようもねえな…)

## 東の探偵、西の探偵「後編」

館にはいると

中は意外に薄暗く四人の足音が辺りに響き渡っていた

「実は毛利様の他にも

お客様がいらっしやってみして…

空いている部屋の方が

二つしかありませんで…」

申し訳なさそうに礼子が  
部屋へと案内する

「ああ、かまいませんよ

なあ？蘭

お前コナンと一緒にいいだろ？」

げっ、とコナンは小五郎を見た

「うん、じゃあコナン君

荷物置いてこよ

ねえお父さん、後で海に行ってもいい？」

「おう、だが泳ぐのは明日にしろよ？波が高いみたいだからな」

二階の奥の部屋に蘭とコナンの部屋があり、その隣に小五郎の部屋がある

すると小五郎の隣の部屋のドアが開きひょっこり顔を出してきた

「やっぱりや〜！」

蘭ちゃんの声聞こえたからもしやと思うたけど奇遇やなあ、こないな所で会えるやなんて！」

突然かけられた聞き覚えのある声に振り向くと思いがけない人物と会った

「か、和葉ちゃん！？

どうしてここに…！」

蘭達三人はビックリして目を丸くしていた

「って事はだ、あの色黒探偵ボウズも…！」

小五郎がそう言うと

その人物も和葉の隣の部屋からひょっこり顔を出した

「なんや、やっぱり呼ばれとったんかいな

やっぱり探偵は探偵を呼ぶつちゅうこつちやな！」

くどー…

「……やのうておっちゃん！」

不審な目で見られ

平次はなんとかその場をごまかした

コナンに足をつつかれ

平次は同じ高さになるようにしゃがみ込む

「なんでお前がここにいるんだよ？」

コナンはヒソヒソと平次に話し掛ける

「せやから、探偵は探偵を呼ぶうちゅう事やる？」

「やっぱオレらは離れとつても出会ってしまっ運命なんや」

平次がカラカラと笑う

「気色悪い事言うな

お前の所にもきたんだろ？依頼が…」

平次は真剣な顔になり

懐からその依頼書を見せた

「確かに依頼は受けるが

金は返したるお思てな

高校生にあないな金額払うやなんてどうかしとるわ

……おっちゃん所にもって事は工藤、お前ん所にも来たんか？」

コナンは頷いた

「ああ、同じく前払いされた金を返えそうと思ってな」

「コナン君？」

先に荷物置いて来よお？」

蘭に呼ばれて

子供の演技で返事する

「……しかし、日に日に小学生の演技が板についてきてんなあ、  
見てておもしろいわ……お前の二重人格っ」

背中越しに聞こえた平次のつぶやきにコナンは思わず睨み付けた

## 二人のジャーナリスト

「せやけど、ほんまこんな島国で工藤に会えるなんて思わへんかったわ」

服部は砂浜に腰を下ろし

海水で足をバシャバシャさせてはしゃいでる蘭と和葉に視線を向けたまま隣に座っているコナンに話しかけた

「…ああ、三人も探偵を呼び集めるくらいって事は  
依頼者の佐々木栄蔵氏はよほどその事件の真相を知りたいらしいな  
それもすぐに…」

コナンは工藤新一宛ての依頼書を見た

「十二年前の事件、オレなりに少し調べて来たんやけど、どれも崇りや呪いやとしか書いとらんし…」

唯一見つけたんが

三年前にこの島を訪れた

ジャーナリストの一人が

行方不明になって未だ見つからんて事やし…」

世間は島の住民が全員怪死した事に

この島に伝わる崇り神のせいだとしか取り上げず

真相はわからず仕舞に迷宮入りしたのだった

ふと視線を海辺にいる蘭達に移すと  
見知らぬ男二人に話しかけられていた

「ん？誰やあいつら…」

とりあえず立ち上がり

蘭達の元へ駆け寄り二人

「お嬢さん達観光？」

「珍しいね女の子がこの島に来るなんて」

体格の良い日焼けした男が最初に蘭と和葉に話しかけてきた  
その後カメラを首から下げた優男が続いた

「観光ちゃんよ、なあ平次？」

和葉は男達の後ろに立つ平次に話しをふった  
いつの間にかいた平次とコナンにビックリしたが  
聞き覚えある名前に

優男の一人がカメラのシャッターを押し出した

「君、あの高校生探偵の服部平次君でしょ！？  
いやあゝこんな所で会えるとは光栄だねっ」

握手を求めてきた優男に平次はつい笑顔となっていた

「ねえ、お兄さん達は観光にこの島に？」

コナンは男達を見上げる

「いや、オレ達は

十二年前の事件の真相を追ってるただのジャーナリストさ」

体格の良い男がそう言った

「あんたらも十二年前の事件を？  
て、事は佐々木栄蔵氏に依頼されてか？」

平次が疑問を口にした

「いや、僕達は独自に  
三年前にもこの島に来たんだけど仲間が行方不明になってしまっ  
てね  
それがかねて十二年前の真相を僕らなりに調べてるんだ」

この二人が平次がさつき言っていた三年前の事件に関係ある人物か…  
コナンはふと体格のいい男の体を見て思った

ダイバーでもやってるのか日焼けは手首から上は少し薄くなっていた  
それと海水を浴びてるせいか髪はいたんでいた

日焼けしたその男は

中川 一樹

もう一人のカメラを持った優男が金田 裕昌というらしい

「あつ、そろそろ約束の5時になるよ？  
戻らないと…」

蘭がふと腕時計を見て

依頼主と会う約束の時間になるのに気が付いた

「あつ僕達も佐々木さんの所に厄介になるんだ  
良かったら一緒に行ってもいいかな？」

裕昌がそう言うと、和葉は承諾し、一緒に館に戻る事になった  
楽しそうに話す四人の後ろでは、なんとなく面白くなさそうな感  
じで平次とコナンが歩いていた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4635h/>

---

影紡ぎ島の祟り神

2010年10月11日04時42分発行